用語解説

オキナエビスガイ

—貝のシーラカンス—

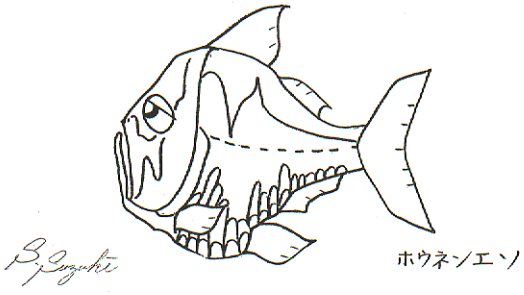
深海研究部　藤倉 克則　Katsunori Fujikura

オキナエビスガイ *Mikadotrochus beyrichii* は，動物分類学上では軟体動物門，腹足綱，原子腹足目，オキナエビスガイ科に位置する動物で，簡単にいうと最も原始的な巻き貝の仲間の1種です。この仲間は，現生種で20種以上知られているようですが，今回は，オキナエビスガイも含めたオキナエビスガイ科の巻き貝（以下オキナエビスガイ類）について示します。この貝の形態的な特徴は，低円錐の形で殻にはスリット（切れ込み）があり，また模様は炎が燃え上がるような美しい色彩を呈するものがほとんどです。生息水深も100 m を超すものが多く，水族館などの飼育例も少ないので，一般に生きている個体を目にすることもあまりありませんが，4円切手の絵にベニオキナエビスガイが描かれているので思いあたる方も多いかと思います。

写真－1　4円切手のベニオキナエビスガイ
（1963年以降使用されている普通切手，300 % に拡大）

オキナエビスガイ類は古生代中生代に大繁栄したとされ，生物の進化を知るうえでも貴重な動物のひとつですから貝のシーラカンスと例えられることもあり，生物の進化を研究するうえで極めて重要な生物です。しかし，生息数はそれほど多くなく，漁網で混獲されたものなど少ないサンプルで研究が行われていたため，研究を進めることがなかなか難しかったようです。「しんかい2000」でも相模湾や鹿児島県黒島周辺で潜航調査をした際に数種を確認していますが，生きた状態での観察は極めて珍しいことから博物館や水族館などからの写真の借用希望が多くあります。また，最近，海洋科学技術センターでも横須賀市自然博物館との共同研究で，相模湾の三崎沖で「ドルフィン-3 K」等を用いてオキナエビスガイの調査を始め，現在でも葉山にある「しおさい博物館」で飼育中です。ほかの場所で飼育した例もありますが，その時にはうまい具合に産卵して，卵の大きさや産卵期の推定など面白い知見が得られました。このように調査機器が充実してきたため我々にとってもなじみやすい貝になってきたのですが，一昔前の生物学者にとっては極めて入手しにくいサンプルでした。入手しにくい例として次のような話があります。1800年代の後半にこの貝を採集した人が，当時の研究者に持参したところ，報酬として当時のお金で40円という大金をもらうことができ一夜にして大金持ちになることができたそうです。それ以来この貝は別名「長者貝」とも呼ばれています。また，リュウグウオキナエビスガイは，二十数年前1ドル360円の時代に1万ドルという高値がついたほど

写真－2 「しんかい 2000」第 550 潜航で観察できたテラマチオキナエビスガイ。殻の表面に多数のスナギンチャク類が付着している（鹿児島県水産試験場・山口厚人氏撮影）。

です。

このように学術的な価値ばかりでなく，その美しさや，奇妙な形，そして何より希少価値が高いことから，貝の収集家が最もあこがれ大切にするのも，このオキナエビスガイ類です。当然収集家の間の市場価値は最も高い巻き貝の 1 つです。筆者が，数年前，沖縄県那覇市の土産物屋で見たリュウグウオキナエビスガイは，大きさが人間の顔ほどの大きさで立派なものでした。その時，値段が示されていなかったので店員さんに聞いたら 300 万円と言われ驚いたものでした（私は収集家ではないが）。ちなみに，2 年後に，たまたま同じ店を訪れる機会があり，ショーケースを覗いたらこの貝はまだ売れずに残っていました。ちょっと意地悪で再び値段を聞いたら 150 万円に値下がりしていました。この業界でもバブルがはじけたようです。